

大正大震火災絵巻

これは三康図書館所蔵の卷子本『大正大震火災絵巻』のうちから2枚を選んだものである。これには12枚の絵が描かれている。いずれも大正12年9月1日の関東大地震(M=7.9)のときの火災の様子を描いたものである。

関東大地震の時代には写真・映画も普及し、多くの影像資料が残されているが、絵は写真等と異なり筆者の心に強く焼き付けられた部分が、絵画的表現を通じて観る者の心情に強く訴えるものをもっている。

図1は「浅草観世音の霊顯」と題され、仁王門・観音堂・五重塔などが焼け残っている図柄である。ここに霊顯というのは、次のような事実を指していると思われる。

地震後、浅草寺境内には難を逃れてきた人々が数万人も集まっていた。9月1日の夜には火の手に囲まれ、旋風も巻き起こった。一步誤れば、被服廠跡と同じような結末になるところであった。これを回避し、観音堂などが残ったのは、①寺と象潟警察署が避難民の荷物の持ち込みを防いだこと、②浅草公園消防隊の大活躍、③避難民の消火協力による。特に③については、鳶の頭と8人の組手が避難民に声をかけ、近くにあった瓢箪池(現在の馬券売場の裏)からバケツリレーで水を送り、燃え広がるのを防いだ。当時の学術的報告のなかでも、「ポンプ」による消火より「バケツ」等を利用した消火方法が有効であったと記されている。

図2は「被服廠跡の劫火」と題され、数多くの荷物が持ち込まれている様子、火が移ってからの人々の表情、そうして、馬や荷車をも吹き上げる旋風の様子を生生きと伝えてくれる。

旋風のことはあまり知られていないようであるが、関東大地震のときには強い旋風が各地で発生、東京だけでも105件に達している。被服廠跡での旋風の様子はおよそ以下のようなものである。

旋風は午後3時ころに始まった。「建築中の家が急に倒れた、空が暗くなって来た、5間(約9m)も歩くと吹き倒され平伏していると砂利を顔に吹き付けた、トタン板や足場用の丸太など飛んで来た、材木で足を折られた人が居た、18、19の女が鞠のやうに転がされて居た、郵便車なども転がって来た、風は30分位も継続したと思う、場の中央から南方に居た人が多く助かった。」

また、別の人の話によると「河の水が巻き上げられて居た、船が一艘河の中で廻転して居た、水は30間(27m)も揚げられたかと思う、間もなく安田邸(被服廠跡の西隣)の方に襲って来た、そして黒い煙の柱に変わった、時計と反対に旋って居たと思ふ」、「被服廠跡で遭難した、旋風で物の飛んで来るのが丁度何処からか一撃射撃でも受けて居るかと思はれた、5分間毎位に襲って来た、30分位毎に合間があるので其時に首を上げて見廻す事が出来た、物品は一方に飛ばされるかと思ふと又反対の方へ吹き戻されて行った、旋風の襲って来る前には何だか息のつまるやうな予感があつた、今に来るなどと思って居るとやって来た」。

こういう当時の人々の体験談を図2とダブらせてみると、現場の様子が生き生きと甦ってくる。

さて、関東地震での焼失は44.7万軒で全壊12.8万軒、半壊12.6万軒の合計よりも多い。また、東京の火災のみが話題になるが、横浜・横須賀・浦賀・鎌倉・秦野・厚木・小田原・真鶴・船形でも大火があつた。特に横浜では約5.6万戸が焼失した。また旋風30が発生し、そのうちの6件は特に激しいものであつた。浦賀では総戸数の約80%が全半壊・全半焼しているし、千葉県の船形町では町の主要部が焼き尽くされた。

旋風は大火に伴うものであるが、その研究は遅れている。

宇佐美龍夫／東京大学名誉教授

浅草観世音
の霊顯

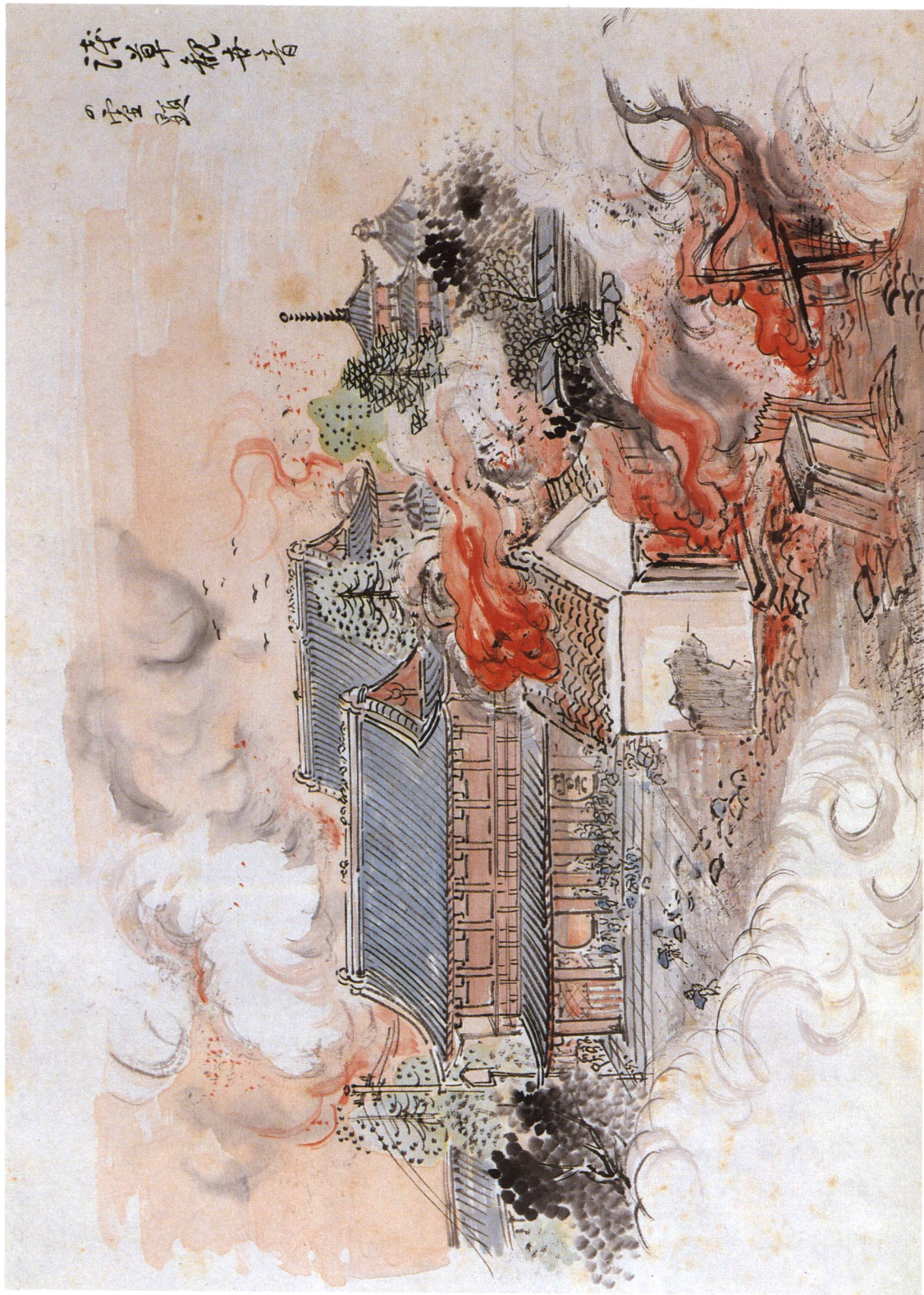


図1 浅草観世音の霊顯

被服廠跡の却火



図2 被服廠跡の却火